維新前の慶応３年(1867)、幕府は、フランスの勧めに従って、パリで開かれる万国博覧会へ参加することを決定した。そして将軍の名代として、徳川慶喜の弟である徳川民部大輔昭武を派遣することとした。また、フランス公使としては外国奉行の向山隼人正を任命した。昭武はまだわずか14歳の少年だったので、目付の山高石見守を御守役として付き添わせ、同時に公使の職務を監督させることとした。使節の徳川昭武は、まず博覧会の開場式に列席し、ついで新しく条約を結んだ各国を訪問することとなった。久能文庫にはこの遣仏使節に関する記録の写本が所蔵されている。以下の２点である。

51	御用留（写本）		
	Q293-3		
	慶応３年パリ博覧会開催につき、使節一行の渡船準備、諸手続、往復書簡、航海中及び滞仏中の日記等を集めたもの。		

52	御書翰（写本）		
	Q293-4		
	慶応３年パリ博覧会開催につき、使節一行の書簡の控え。２通の英文書簡を含む86通が収録されている。		

＊いずれもマイクロフィルムあり。

◆『御用留』に収められている文書の中に、徳川慶喜が当時のフランス皇帝ナポレオン３世にあてた国書がある。

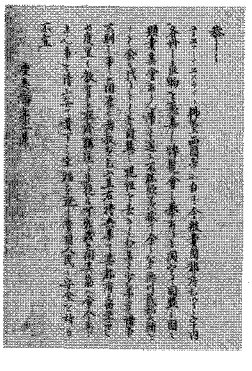
「恭しく　ユーエマーイエステイト仏蘭西国帝に白す

今般貴国都府におひて宇内各州の産物を嵬集し、博覧会の挙ありときく、定て同盟の国々　顕貴集会あらん事と遥に欣羨にたえす　依て余か弟徳川民武大輔をして余の代わりとして同盟の親誼を表さしむいまた少年にて諸事不満の事に候間、厚く垂教を乞ふ　且右礼典華て其都府に留学せしめ度宜く教育あられ度　猶追々生徒も差渡すへく候間、其筋へ命令あられん事を乞ふ　依て貴下の幸福を祝し貴国人民の安全を祈る　不宣　　慶応三卯年正月　　源御名　」

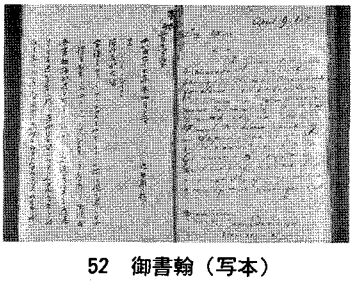
また『御用留』には、皇帝への献上品として、水晶玉、組立茶屋、源氏蒔絵手箱、梅竹鶴亀蒔絵手箱、実測日本地図が記されている。

この遣仏使節の一行には、明治・大正時代の日本財界の大指導者となる渋沢栄一が加わっていた。彼は、出港からパリ到着まで、またその後のヨーロッパ周遊の旅の様子を克明につづった『航西日記』を著した。これにより、1867年のパリ博覧会の状況を知ることができる。

＜参考文献＞　「本文庫の善本について（五）」（『葵文庫ト其事業』133号　所収）（SZ01-3）
『航西日記』（世界ノンフィクション全集　14巻　所収）（080-106-14）
『改訂版　万国博覧会』（606.9-39）



51　御用留（写本）



52　御書翰（写本）